

# 門 田 遺 跡

福岡県春日市上白水所在の遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第57集

2010

春日市教育委員会

# 門田遺跡

福岡県春日市上白水所在の遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第57集

## 序

春日市は福岡市の南に隣接し、昭和47年の市制施行以来、福岡市のベッドタウンとして都市化が進みました。同時に戦後の高度成長期には山陽新幹線車輛基地建設等が行われ、かつての農地や山林は開発されました。一方、これらの開発に先立ち行われた遺跡の発掘調査により、貴重な文化財が多く確認されることになりました。門田遺跡もその一つで、旧石器、縄文、弥生、古墳、歴史時代の各時代の遺構、遺物を含む複合遺跡ですが、中でも弥生時代には前期末以降集落が形成され、多数の甕棺墓も検出されました。春日市西部の河岸段丘に位置する寺田長崎遺跡、辻畑遺跡、門田遺跡、原遺跡、天神ノ木遺跡を大きなまとまりとして見ると、奴国の拠点集落の一つと考えられます。また、原遺跡は弥生時代中期を主体とする甕棺墓群ですが、大部分が保存され、平成8年に市指定史跡となっています。

本書は春日市が平成8年度に発掘調査を実施した門田遺跡5次調査の調査報告書です。門田遺跡は旧上白水村集落の西部にあたり、東に隣接する中白水遺跡とともに上白水村の前身である中世の館跡が検出されています。門田遺跡5次調査では、これら集落の変遷の一端を考察する上で知見を得ることができました。

本書が埋蔵文化財への理解を深める研究資料として活用され、また市民の皆様が郷土の歴史を知る一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際し御指導御協力を賜りました方々に深く謝意を申し上げます。

平成22年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山本直俊

## 例 言

- 1 . 本書は1997年 1 月17日から同年 3 月12日にかけて春日市教育委員会が実施した門田遺跡 5 次調査の報告書である。
- 2 . 遺構の実測は平田定幸、森井千賀子が行い、製図は須崎葉津子、牧平佳恵が行った。
- 3 . 遺物の実測は末田敬子、吉富千春、平田が行い、製図は末田、吉富、平田が行った。
- 4 . 掲載した写真のうち、遺構については(有)空中写真企画、平田、森井が撮影し、遺物については岡紀久夫(文化財写真工房)が行った。
- 5 . 本書に使用した 2 万 5 千分の 1 の地形図は、国土地理院発行の『福岡南部』( 1991年 ) である。
- 6 . 本書の遺構実測図に用いた方位は磁北である。
- 7 . 出土した陶磁器の分類は宮崎亮一編「太宰府条房跡 X V 陶磁器分類編」2000 太宰府市教育委員会による。
- 8 . 今回報告する調査地点は、門田遺跡 3 次調査として発掘調査を開始したが、以後に周知の埋蔵文化財包蔵地の追補訂正を行ったため、5 次調査に次数を改めた。(春日市教育委員会 1998『春日市埋蔵文化財年報 5 平成 8 年度』では「門田遺跡( 3 次調査)」で概要報告をしている。)
- 9 . 本書の執筆、編集は森井が行った。

## 本文目次

I	はじめに.....	1
1	調査に至る経過.....	1
2	調査の組織.....	1
II	遺跡の位置と環境.....	2
III	調査の内容.....	5
1	弥生時代の遺構と遺物.....	5
(1)	土 壙.....	5
(2)	出土遺物.....	5
2	歴史時代以降の遺構と遺物.....	7
(1)	土 壙.....	7
(2)	井 戸.....	8
(3)	溝状遺構.....	9
(4)	出土遺物.....	10
3	風倒木痕.....	14
IV	まとめ.....	19

## 図版目次

図版 1	1	調査区全景（南から）
	2	調査区西側全景
	3	調査区東側全景
図版 2	1	2号土壙土器出土状況（東から）
	2	3号土壙土器出土状況（北西から）
	3	4号土壙（東から）
図版 3	1	5号土壙（南から）
	2	1号井戸土器出土状況（東から）
	3	1号井戸完掘状況（東から）
	4	1号井戸土層断面（東から）
図版 4	1	1号風倒木痕掘削前（東から）
	2	調査区北西部風倒木痕掘削前
	3	1号風倒木痕完掘状況（東から）
	4	2号風倒木痕完掘状況（南から）
	5	3号風倒木痕完掘状況（北東から）

	6	4号風倒木痕完掘状況(西から)
	7	5号風倒木痕完掘状況(南から)
	8	6号風倒木痕完掘状況(北から)
図版5	1	7号風倒木痕完掘状況(北から)
	2	8号風倒木痕完掘状況(北から)
	3	1号風倒木痕土層断面(西から)
	4	2号風倒木痕土層断面(西から)
	5	6号風倒木痕土層断面(西から)
	6	7号風倒木痕土層断面(西から)
	7	8号風倒木痕土層断面(西から)
図版6		土壌、井戸、ピット出土弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器
図版7		土壌、ピット出土土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄滓、井戸出土鉄釘

## 挿 図 目 次

第1図	門田遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000)	3
第2図	門田遺跡位置図(1/2,500)	4
第3図	門田遺跡5次調査遺構配置図(1/200)	6
第4図	2号土壌実測図(1/20)	7
第5図	3号土壌実測図(1/20)	8
第6図	2・3号土壌、ピット出土弥生土器(1/4)	9
第7図	1号土壌実測図(1/40)	10
第8図	4号土壌実測図(1/40)	10
第9図	5号土壌実測図(1/40)	11
第10図	1号井戸実測図(1/40)	11
第11図	4号土壌、1号井戸出土土師器、須恵器、陶磁器(1/3)	12
第12図	1号溝出土須恵器(1/3)	12
第13図	ピット出土須恵器、土師器(1/3)	13
第14図	遺構検出時出土陶磁器、須恵器(1/3)	14
第15図	3号土壌、ピット出土石器、鉄滓、1号井戸出土鉄釘(1/2)	14
第16図	1・2号風倒木痕(1/60)	15
第17図	3・4・5号風倒木痕(1/60)	16
第18図	6・7号風倒木痕(1/60)	17
第19図	8号風倒木痕(1/60)	18

# I はじめに

## 1 調査に至る経過

門田遺跡5次調査は共同住宅建設に伴う緊急発掘調査である。対象地の地番は福岡県春日市上白水7丁目157番地（調査時は大字上白水字門田790番1、7）で、開発に先立ち埋蔵文化財事前調査依頼書が提出され、1996年10月19日に試掘調査を行った。その結果、対象地全体に遺構が確認されたため、受託事業として本調査を実施することとなった。発掘調査は1997年1月17日から開始し、同年3月12日に終了した。

## 2 調査の組織

発掘調査を行った平成8年度、報告書刊行の最終的作業を行った平成21年度の調査の組織は以下のとおりである。

### 発掘調査（平成8年度）

教 育 長 三原 英雄  
教 育 部 長 柴田 利行  
文化財課長 井上 武美  
管 理 係 課長補佐 谷 都師之  
同 事務主査 田中 和彦  
同 事務主査 村上不二夫  
同 事務主査 増永 睦司  
同 嘱 託 清永久仁子  
文化財係 係 長 丸山 康晴  
同 技術主査 平田 定幸  
同 技術主任 中村 昇平  
同 技術主任 吉田 佳広  
同 技術主任 森井千賀子  
同 嘱 託 清原 史代

### 報告書作成（平成21年度）

教 育 長 山本 直俊  
社会教育部長 古賀 俊光  
文化財課長 西尾 純司  
管 理 担 当 課長補佐 白水 心子  
同 主 査 塩足 雅弘（～6月）  
同 主 査 福間 義彦（7月～）  
同 主 任 山田ひとみ  
文化財担当 課長補佐 平田 定幸  
同 主 査 吉田 佳広  
同 主 査 森井千賀子  
同 主 任 井上 義也  
同 嘱 託 松田 千恵  
同 嘱 託 牧野 幸子  
同 嘱 託 齋藤 礼

## Ⅱ 遺跡の位置と環境

門田遺跡は福岡県春日市上白水6、7丁目に所在する。那珂川の支流である梶原川の右岸で中位段丘に位置し、標高28m前後を測る。旧上白水村の集落の西辺にあたる。

当遺跡の西側は、昭和47年以降、山陽新幹線車輛基地建設に伴い福岡県教育委員会によって発掘調査が行われた門田遺跡門田地区である。この調査では弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構と遺物が検出されており、今回調査した5次調査地点に近い東側では鎌倉時代の住居跡が2軒検出されている。また、平成4年度以降は春日市教育委員会が調査を行っており、市教委の調査による門田遺跡1次調査（調査時は上白水西遺跡）は弥生時代中期の竪穴住居跡、土壇2基の他、中世の遺構、遺物が大半を占め、鍵形に曲がる溝は居館の区画であると考えられる（註1）。2次調査（調査時は門田遺跡1次調査）では遺構面が2面確認され、掘立柱建物跡1棟、土壇20基、溝6条が検出された。土壇のうち井戸と考えられるものは調査区の北側に密集しており、出土遺物から8世紀から12世紀と考えられる（註2）。4次調査（調査時は2次調査）は調査区の北側と南側で約2m以上の高低差があり台地の南斜面にあたる。溝状遺構2条、土壇5基、井戸2基が検出された（註3）。遺構の密度は低く、地形的にみると調査区の東側と西側の標高がやや高くなることから、福岡県が発掘調査した門田遺跡谷地区の谷頭にあたると思われる。

当遺跡北東側の中白水遺跡は弥生時代の集落跡と中・近世にいたる複合遺跡であるが、中世以降の居館を中心とした遺跡が広がっている。居館跡は一辺約42～50mの溝で囲まれた矩形の区画の内部に、多数の柱穴、土壇、井戸跡が検出されている。また、出土遺物から居館跡は13世紀頃には成立し、18世紀まで成立期の村落から大きな変化をせずに存続したとされる（註4）。

当遺跡は中位段丘に所在するが、この周辺で福岡県教育委員会が発掘調査した柏田遺跡は縄文時代後晩期の遺跡で、竪穴住居跡が検出されている。春日市教育委員会が発掘調査した柏田遺跡2次調査は、杭を打った溝から夜臼式土器や板付Ⅰ式土器が出土し、付近に弥生時代前期の水田遺構の存在が想定される。この他、辻畑遺跡、門田遺跡において前期末頃から中期前葉の袋状竪穴跡がみられる。弥生時代中期になると門田遺跡、天神ノ木遺跡、石尺遺跡、原遺跡などの遺跡では集落や墓が検出され、春日丘陵西側の中位段丘面に集落の広がりがみられる。福岡県教委が調査した門田遺跡辻田地区A群24号甕棺墓は甕棺内部に円弧文があり、副葬された鏡の痕跡と考えられている。門田遺跡から南に約3kmの地点で、福岡平野の最奥部にある安徳台遺跡は弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。特に弥生時代の遺構では直径10m以上の大型円形住居跡が複数あり、2号甕棺墓の被葬者は43点以上の貝輪を装着していたことから有力首長の墓と考えられ、奴国を構成する拠点集落に位置づけられる（註5）。那珂川右岸の低位段丘上にも中原塔ノ元遺跡群や宗石遺跡群のように縄文時代から平安時代にかけての遺跡がひろがる。

（註1）春日市史編纂委員会編「第2章 弥生時代 第2節 春日市西部の遺跡」『春日市史』上巻（1996）

（註2）春日市教育委員会編「3. 門田遺跡」『春日市埋蔵文化財年報3』（1995）

（註3）春日市教育委員会編「3. 門田遺跡（2次調査）」『春日市埋蔵文化財年報4』（1996）

（註4）春日市史編纂委員会編「第3章 春日市域の中世の主要な遺構」『春日市史』上巻（1996）

（註5）那珂川町教育委員会編「安徳台遺跡」那珂川町文化財調査報告書第67集（2006）





第1図 門田遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- |            |           |            |              |             |
|------------|-----------|------------|--------------|-------------|
| 1 西方遺跡     | 18 大谷遺跡   | 34 下立頭遺跡   | 50 ウトグチB遺跡   | 67 宗石遺跡群    |
| 2 仁王手A遺跡   | 19 原田A遺跡  | 35 寺田池北遺跡  | 51 整理池遺跡     | 68 中原塔ノ元遺跡  |
| 3 松添遺跡     | 20 林田遺跡   | 36 古水遺跡    | 52 ウトグチA遺跡   | 69 カイ子遺跡群   |
| 4 ナライ遺跡    | 21 トバセ遺跡  | 37 石尺遺跡    | 53 イゲ谷遺跡     | 70 松木遺跡群    |
| 5 堂園遺跡     | 22 原田B遺跡  | 38 向野遺跡    | 54 白水池古墳群    | 71 カクチガ浦遺跡群 |
| 6 大南B遺跡    | 23 原田C遺跡  | 39 天神山水城跡  | 55 楠ノ木遺跡     | 72 屋敷ノ内遺跡群  |
| 7 藤波遺跡     | 24 飛脊遺跡   | 40 池ノ内遺跡   | 56 座頭谷古墳群    | 73 前田遺跡群    |
| 8 豆塚山遺跡    | 25 宮ノ下遺跡  | 41 寺田・長崎遺跡 | 57 浦ノ原竊跡群    | 74 仲遺跡群     |
| 9 西ヶ浦遺跡    | 26 一の谷A遺跡 | 42 中白土遺跡   | 58 イゲ谷古墳群    | 75 炭焼古墳群    |
| 10 西平塚遺跡   | 27 一の谷B遺跡 | 43 日拝塚遺跡・  | 59 西浦古墳群     | 76 安德遺跡群    |
| 11 小倉池ノ下遺跡 | 28 一の谷C遺跡 | 日拝塚古墳      | 60 観音山古墳群    | 77 安德遺跡群    |
| 12 ラビラオ遺跡  | 29 大土居水城跡 | 44 辻畑遺跡    | 61 警弥郷A遺跡    | 78 安德台遺跡群   |
| 13 小倉水城跡   | 30 川久保B遺跡 | 45 門田遺跡    | 62 警弥郷B遺跡    | 79 老司古墳     |
| 14 高辻D・F遺跡 | 31 下ノ原遺跡・ | 46 原遺跡     | 63 柏田遺跡      | 80 老司瓦窯跡群   |
| 15 高辻A～C遺跡 | 下白水大塚古墳   | 47 天神ノ木遺跡  | 64 下原遺跡      | 81 老松神社古墳群  |
| 16 大南A遺跡   | 32 重久遺跡   | 48 百堂遺跡    | 65 中原・ヒナタ遺跡群 | 82 野口遺跡群    |
| 17 高辻E遺跡   | 33 天神免遺跡  | 49 ウトグチC遺跡 | 66 今光・地余遺跡群  | 83 観音堂古墳群   |



第2図 門田遺跡位置図 (1/2,500)

## Ⅲ 調査の内容

### 1 弥生時代の遺構と遺物

#### (1) 土 壇

##### 2号土壇(図版2-1 第4図)

2号土壇は調査区の東部にある。やや楕円形を呈し、長軸約1.28m、短軸約1.0m、深さ約68cmを測る。土壇内は南東側に段があり、中段の深さは約55cmである。出土遺物は弥生土器の高杯、器台があり、すべて埋土の上層から出土している。

##### 3号土壇(図版2-2 第5図)

3号土壇は調査区の中央よりやや東にあり、2号風倒木跡を切り、ピットに切られる。楕円形を呈し、長軸約1.9m、短軸約1.8mを測る。深さは約48cmである。出土遺物は弥生土器の甕があり、深さ約25cm前後から出土している。

#### (2) 出土遺物(図版6、7)

##### 2号土壇出土弥生土器(第6図2、4~6)

2号土壇からは高杯、器台、甕が出土した。2は高杯で、杯部の屈曲するところにM字の突帯がある。口径17.6cm、器高21.3cm、脚裾部径13.6cmである。調整は、杯部は内外面ともヨコ方向のミガキ、脚部外面はタテ方向のミガキである。4、5は器台で、4は口径9.9cm、脚裾部径11.6cm、器高12.1cmである。5は口径9.0cm、脚裾部径10.4cm、器高17.0cmである。4、5とも外面は器壁の磨滅が著しく調整不明であるが、内面は荒いナデである。器台の中央はほとんど調整をしていないので器壁が厚いが、上下の端部は中央部より薄い。胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を多く含む。5は上部の大半を欠損する。6は甕の口縁部細片である。口縁部はヨコナデ、胴部内面はタテハケ後ナデ調整、外面は磨滅のため不明である。

##### 3号土壇出土弥生土器(第6図7)

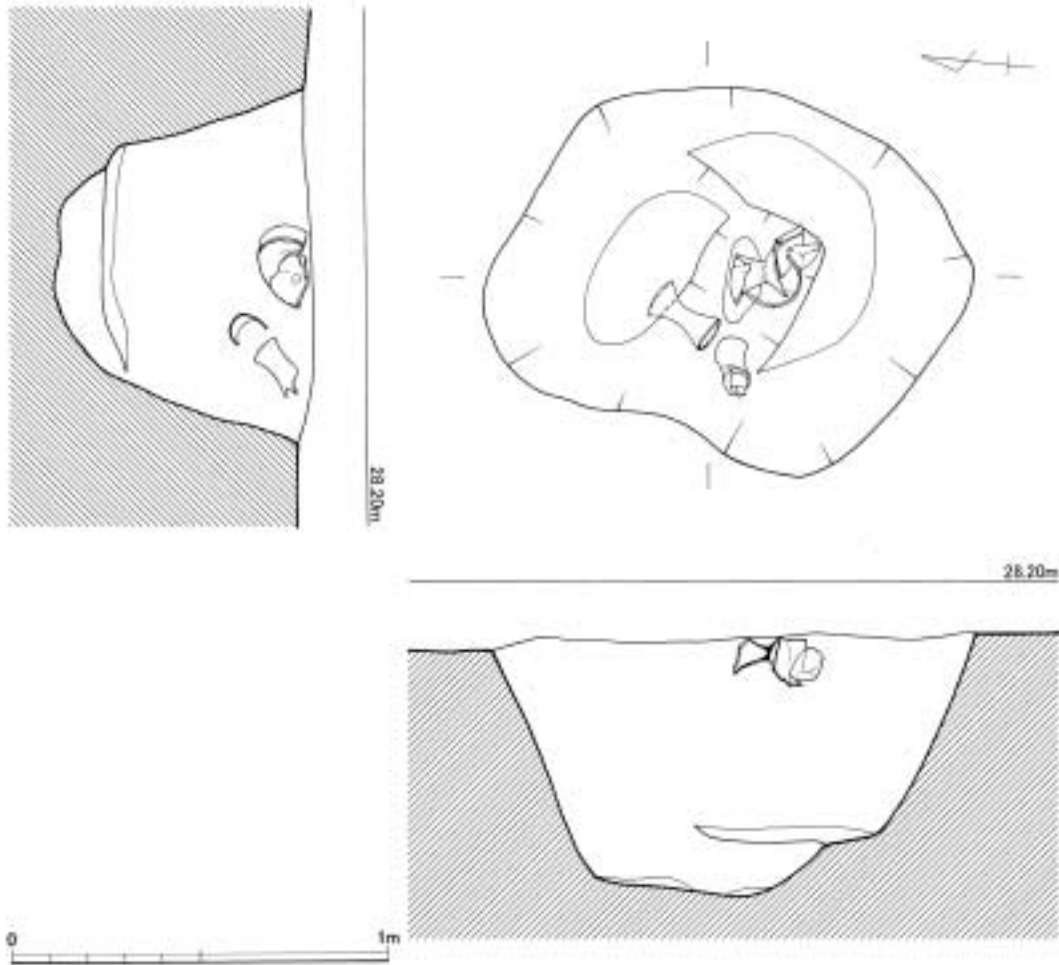
3号土壇からは甕が出土した。口径29.95cm、器高38.3cm、底径7.2cmを計る。底部外面はやや上げ底で、口縁端部は直線的である。調整は、口縁部はヨコナデ、口縁部から下に約3cm程タテハケ後ヨコナデ、胴部外面はタテハケ、内面は磨滅のため調整不明である。胎土は1~2mm前後の石英、長石、雲母を多く含む。外面は煤が付着している。胴部を約2/3程欠損する。

##### ピット出土弥生土器(第6図1、3)

弥生土器は細片が多く、図化できるものはほとんどなかった。1はP283から出土した。瓢形土器の胴部細片で、内外面ともナデ調整で突帯部はヨコナデである。灰黄褐色を呈する。3はP245から出土した。甕の底部で、約1/5残存する。復元底径は7.6cmである。1mm未満の石英、長石、雲母を多く含む。橙色を呈する。



第3図 門田遺跡5次調査遺構配置図(1/200)



第4図 2号土壇実測図(1/20)

## 2 歴史時代以降の遺構と遺物

### (1) 土 壇

#### 1号土壇(第7図)

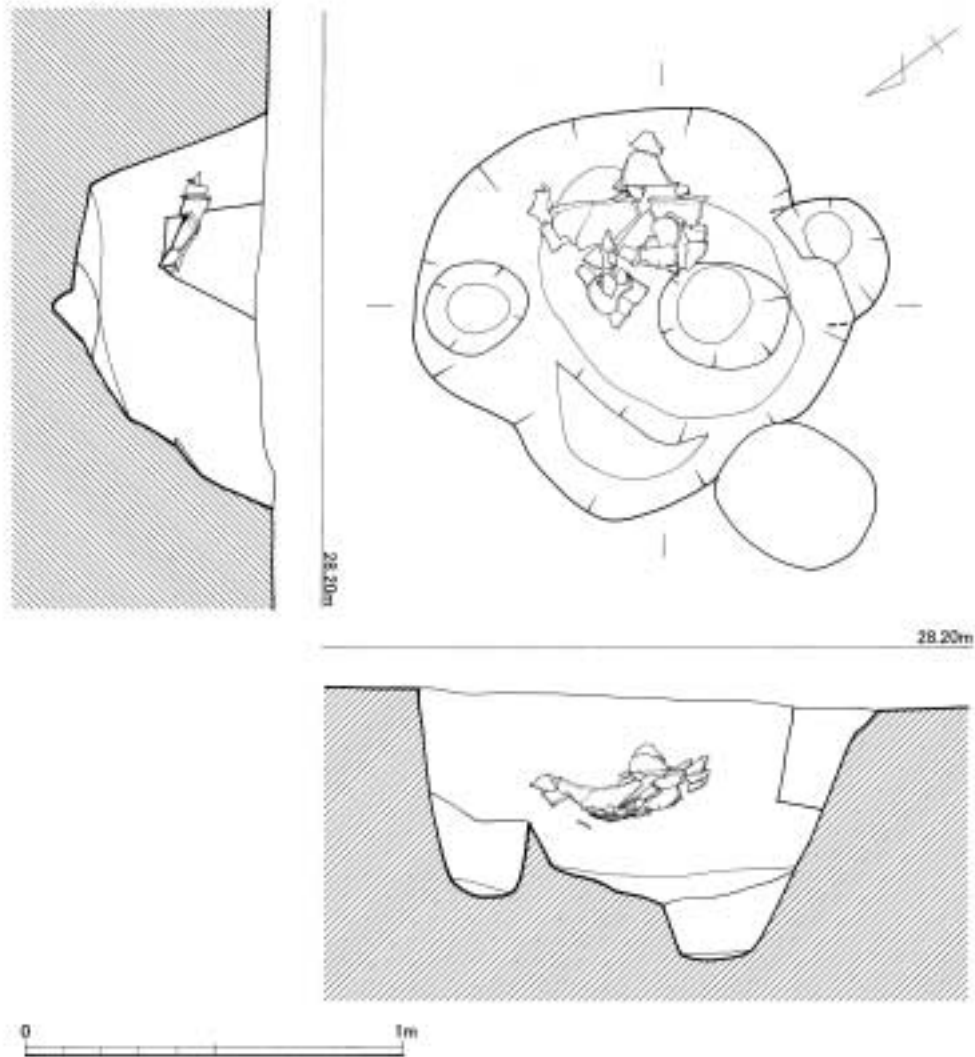
1号土壇は調査区北部中央にある。方形に近い楕円形を呈し、約1.2m×1.3m、深さ約30cmである。土壇内の北側はピットと切り合うが、切り合い関係は不明である。出土遺物はない。

#### 4号土壇(図版2-3 第8図)

4号土壇は調査区の北西部にある。遺構の北側は長方形に近い楕円形で、南側は方形を呈する。遺構検出時は2つの遺構が切り合っているものと思ったが、土層断面では切り合いか、埋土の違いであるのか判断が難しかった。長軸約3.3m、短軸約1.46m、深さ約50cmを測る。土壇の南側は深さ約15cmで、床面が2段になっている。遺構中央では遺構検出面の上場から約10cm前後、オーバーハングしている。出土遺物は糸切り底の土師皿が上層より出土、この他、弥生土器細片なども含む。

#### 5号土壇(図版3-1 第9図)

5号土壇は調査区の北西部で、8号風倒木痕と1号井戸の間にある。方形を呈し、長軸約1.6m、



第5図 3号土坑実測図(1/20)

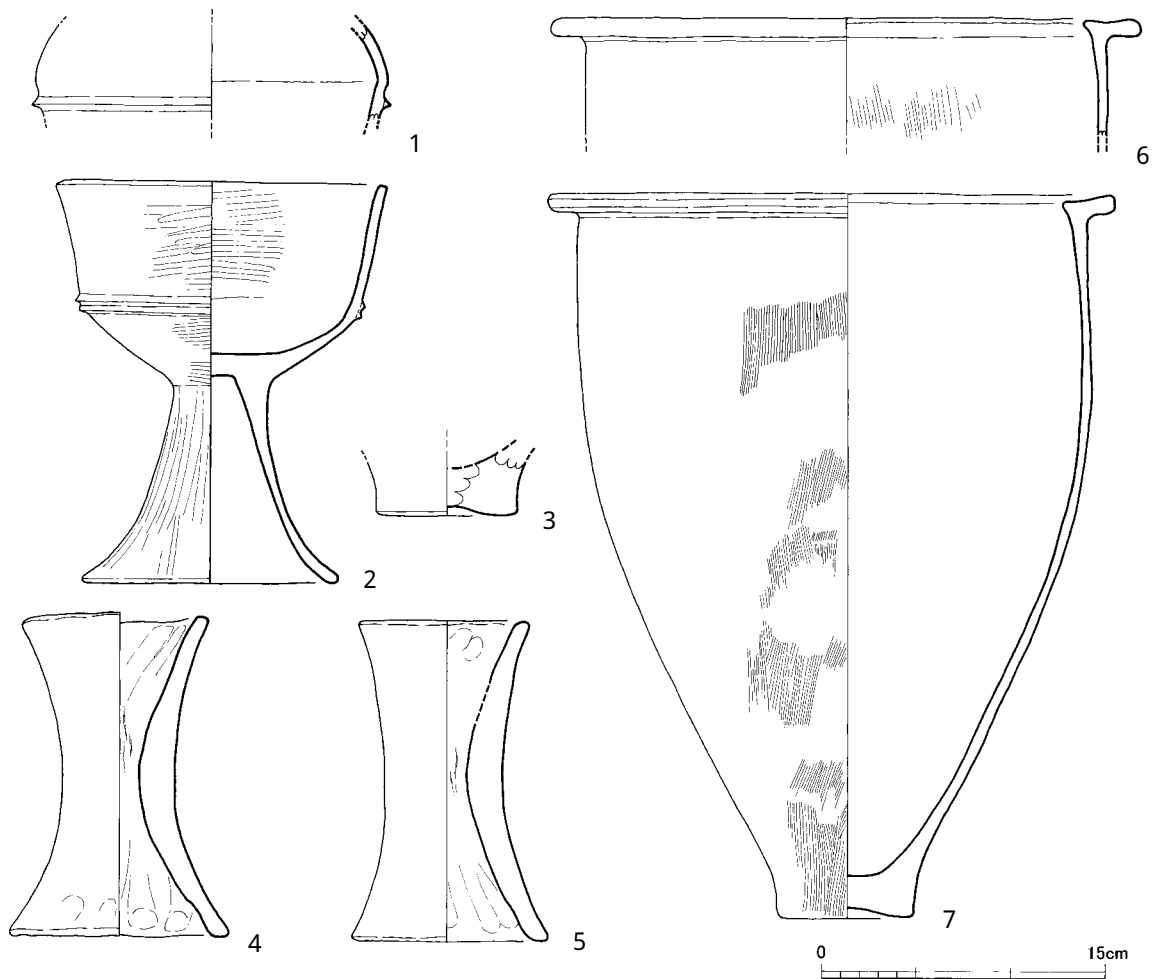
短軸約1.15m、深さ約30cmである。長軸の西側は深さ約10cmの浅い段がある。出土遺物は細片ばかりで、陶磁器の椀の口縁部細片や弥生土器がある。

## (2) 井戸

### 1号井戸(図版3-2~4 第10図)

1号井戸は調査区西部にある。井戸の掘方の大きさは長軸約3.47m、短軸2.9mを測る。遺構検出時の井戸枠上面のプランは直径約75cmである。遺構検出面から深さ約1.02mまで掘方が広いが、この深さから下方は掘方の直径が約1.55mと狭くなる。この掘方の幅が狭くなった所より下を下層とした。最終的な井戸の深さは約1.7mである。土層断面の観察から井戸は1度掘り直されていることがわかる。また、井戸の中心部分はわずかに膨らんでいる部分と凹む部分があり、井戸枠の桶の痕跡と考えられる。確実ではないが、土層断面の凹凸から井戸枠の桶の高さは30cm前後と推定される。出土遺物は土師器の皿、鉢、陶磁器の椀などがあり、遺物の大半は下層の井戸枠内より出土している。





第6図 2・3号土壌、ピット出土弥生土器(1/4)

### (3) 溝状遺構

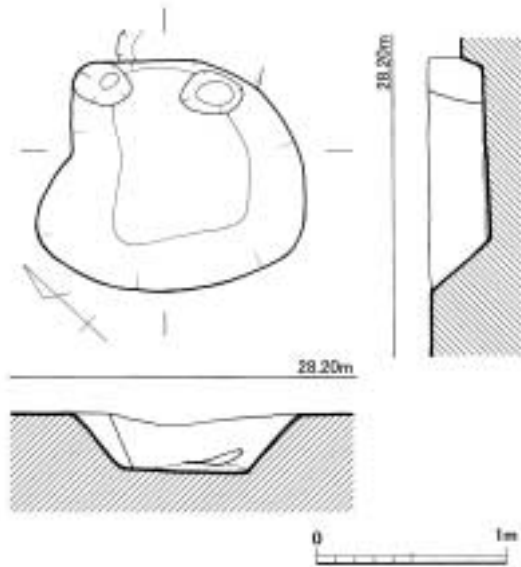
溝状遺構は調査区中央部より西側で2条確認した。また、調査区東部南北方向に延びる暗渠が検出されたが、これらの暗渠は攪乱とした。

#### 1号溝状遺構

1号溝状遺構は調査区の中央部南側にあり、南北方向に延びる。幅60cm前後、深さ2～4cmと遺残状態はよくない。出土遺物は須恵器の高台付き椀の細片や弥生土器細片がある。

#### 2号溝状遺構

2号溝状遺構は調査区の西部にあり、1号溝と同様に南北方向に延びる。幅は50cm前後、深さは2～10cmとこちらも遺残状態はよくない。溝の深さは浅いが南に低く傾斜しており、地形と同様に北から南への流れが想定される。出土遺物は弥生土器と思われる細片のみである。



第7図 1号土壌実測図(1/40)

9.05cmで、糸切り底である。5は白磁の小皿で、口縁端部が口禿げである。復元口径7.8cm、復元底径6.2cm、器高1.55cmを計る。施釉は全体にかかる。太宰府陶磁器分類の皿Ⅸ類1aにあたる。6、7は須恵器で、6は高杯の口縁部細片、7は椀の口縁部細片である。6は口縁端部断面が方形で、端部上面はわずかに窪んでいる。胎土は1mm未満の砂粒をわずかに含む。灰白色。7は口縁部から体部

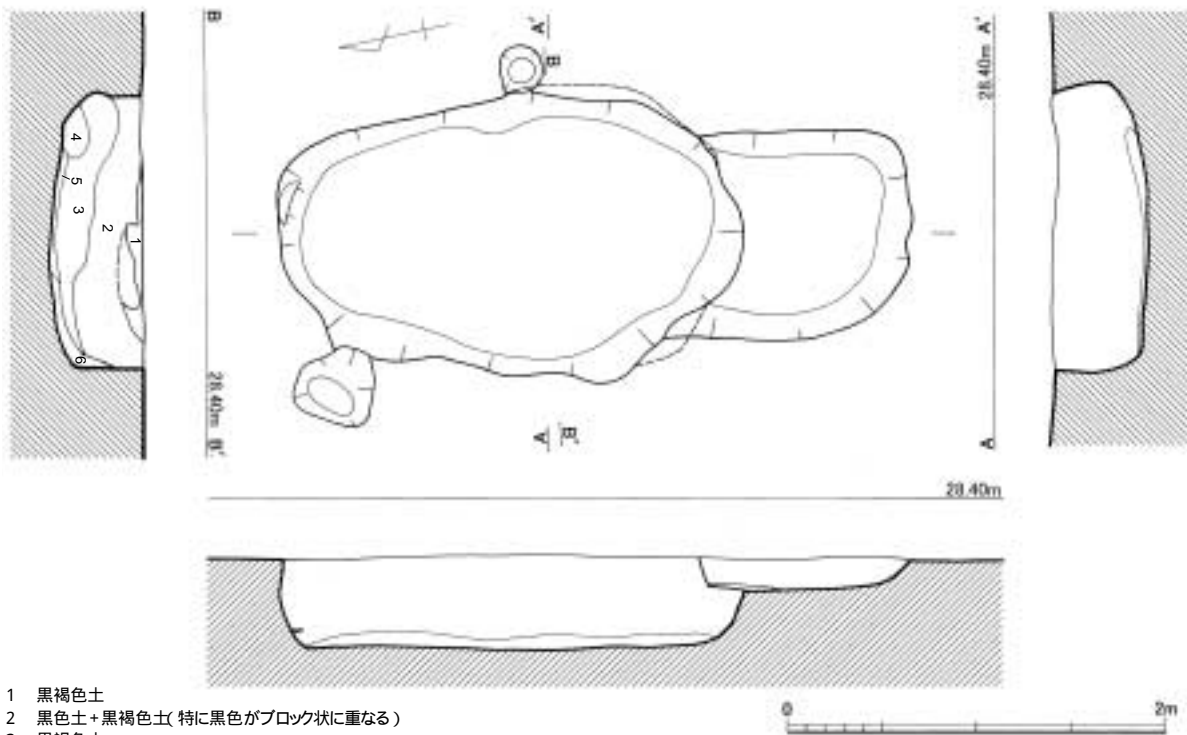
#### (4) 出土遺物

##### 4号土壌出土土器(図版6 第11図1)

4号土壌からは土師器の小皿が出土した。復元口径7.8cm、復元底径6.2cm、器高1.55cmを計る。底部は糸切り底で板状圧痕あり。全体の約1/4残存する。この他、弥生土器の細片が出土した。

##### 1号井戸出土遺物(図版6、7 第11図2~10、第15図5)

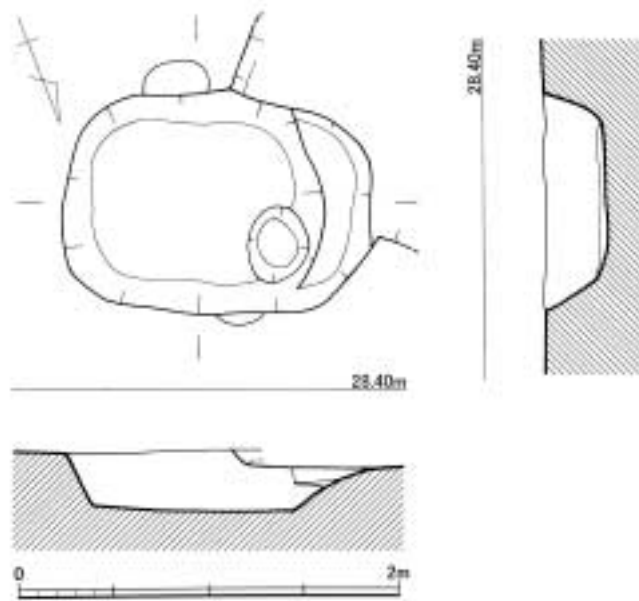
井戸からは土師器、須恵器、陶磁器が出土した。第11図の2~4は土師皿で、2は口径9.8cm、底径6.3cm、器高1.3cmを計る。底部は糸切り底で板状圧痕あり。3、4は杯の底部のみ残存する。3は底径7.8cmを計り、糸切り底で板状圧痕あり。4は底径



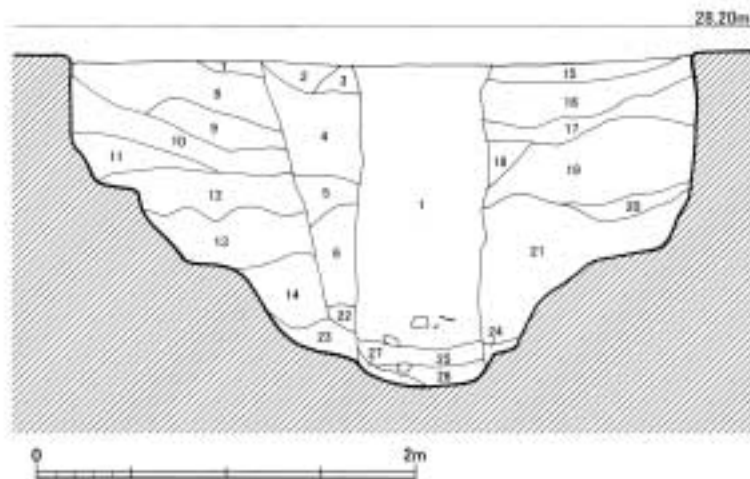
- 1 黒褐色土
- 2 黒色土+黒褐色土(特に黒色がブロック状に重なる)
- 3 黒褐色土
- 4 黒色土-にぶい黄褐色土
- 5 黒色土+黄褐色土
- 6 黒色土+にぶい黄褐色土

第8図 4号土壌実測図(1/40)



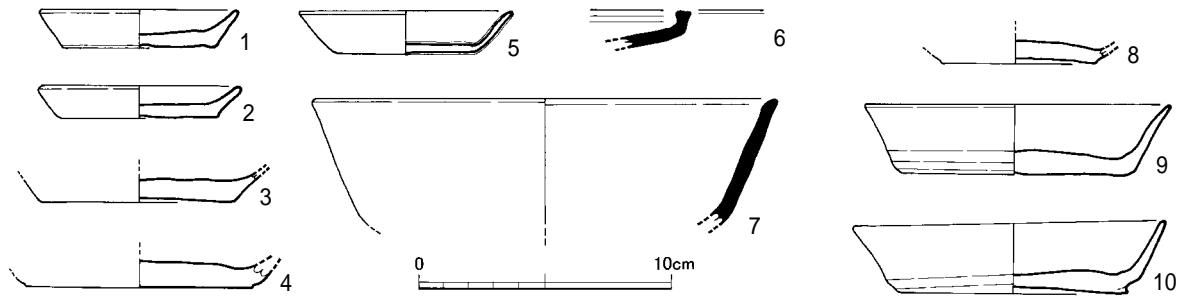


第9図 5号土墳実測図(1/40)

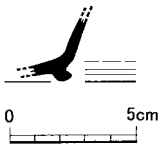


- 1 茶黑色土(わずかに黄褐色土ブロックを含む)
- 2 暗茶褐色土(黄褐色土、黒色土ブロックを多く含む)
- 3 暗茶褐色土(黒色土ブロックを多く含む)
- 4 暗茶褐色粘質土(黄褐色土、黒色土の細粒ブロックを多く含む)
- 5 茶黑色土(黄褐色土、黒色土ブロックを多く含む)
- 6 暗茶褐色土(黄褐色土、黒色土ブロックを含む)
- 7 黄褐色土、黒色土、茶黑色土、暗茶褐色土のブロック混在土
- 8 暗茶褐色黒色土(黄褐色土、黒色土ブロックを多く含む)
- 9 7に同じ
- 10 暗茶褐色土(黄褐色土、黒色土のやや細かいブロックを多く含む)
- 11 黒色土(黄褐色土、灰黄色土ブロックを含む)
- 12 黄褐色土(茶褐色土、黒色土ブロックを含む)
- 13 黄褐色砂質土(黒色土、茶褐色土ブロックをわずかに含む)
- 14 茶灰色土(黄褐色土ブロックを含む)
- 15 暗茶褐色土(黄褐色土、黒色土ブロックを含む)
- 16 8に同じ
- 17 7に同じ
- 18 灰黒色土(黄褐色土、黒色土ブロックを含む)
- 19 黄褐色土(黒色土、茶褐色土、灰黒色砂質土ブロックを多く含む)
- 20 黄褐色砂質土(黒色土ブロックをわずかに含む)
- 21 明黄褐色砂質土(黒色土細粒ブロック、暗灰色砂質土わずかに含む)
- 22 灰黒色土(黄褐色土、黒色土ブロック混入)
- 23 暗灰色砂質土(黄褐色土、黒色土ブロックをわずかに含む)
- 24 暗灰色砂質土(灰黒色土ブロックを含む)
- 25 暗黒褐色土
- 26 黒色粘質土
- 27 暗黄褐色土(シルト質)

第10図 1号井戸実測図(1/40)



第11図 4号土壌、1号井戸出土土師器、須恵器、陶磁器(1/3)



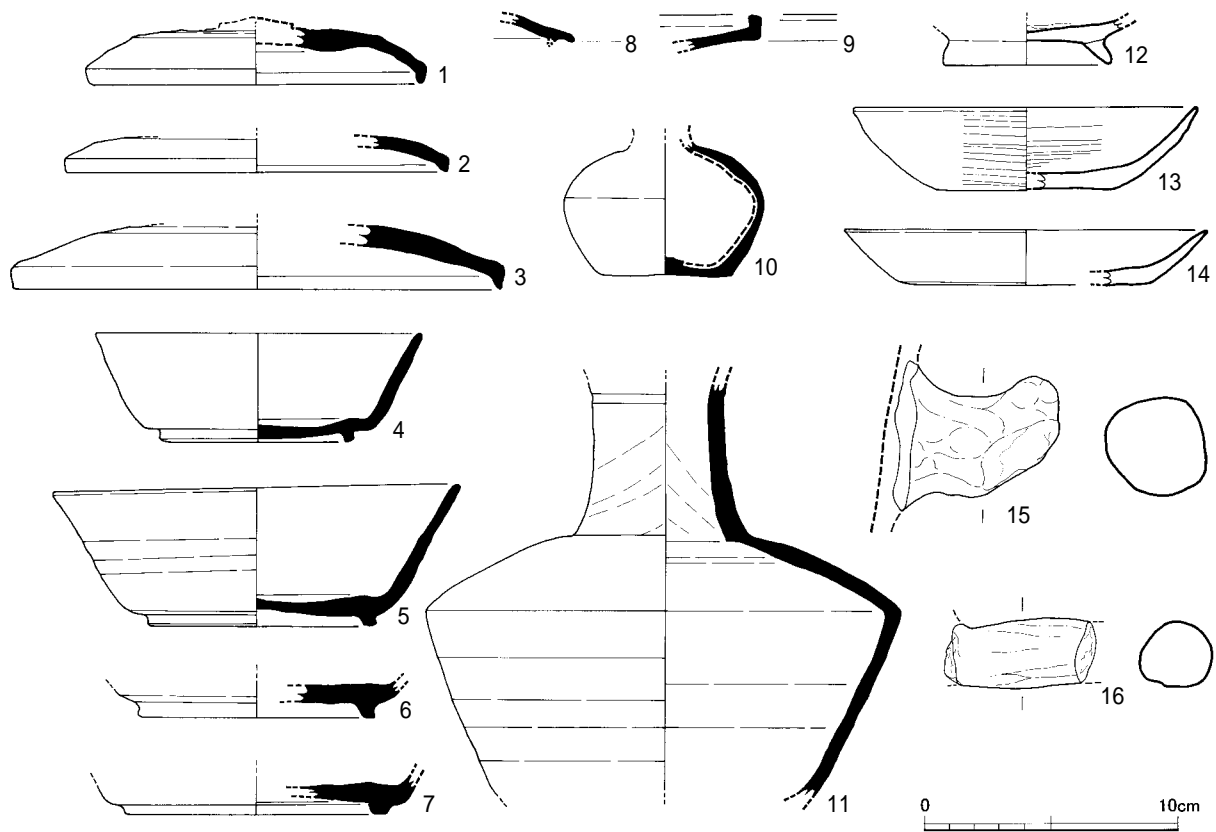
第12図 1号溝出土  
須恵器(1/3)

にかけて直線的である。この他、細片のため図化していないが、外面は鎬連弁文で内面が無文の龍泉窯系青磁碗の口縁部や、捏ね鉢の口縁部細片が出土している。2～6は上層から出土、7は掘方からの出土である。8～10は下層(井戸枠内)出土の土師皿である。8は底径6.2cmである。口縁～体部はきれいに打ち欠かれており、円盤状を呈する。糸切り底で板状圧痕あり。9、10は土師器の杯で、糸切り底で板状圧痕あり。胎土は砂粒をほとんど含まない。9は口径12.15cm、底径9.0cm、器高2.8cmを計る。底部と体部の接合面の調整がやや雑である。口縁部を約1/2欠損する。橙色。10は復元口径12.2cm、底径9.05cm、器高2.95cmである。口縁から体部にかけて約1/2程欠損する。にぶい黄橙色を呈する。

第15図の5は鉄釘である。上層から出土した。錆脹れしているが長さ5.16cm、幅0.6cm、厚さ0.6cmを計る。

#### ピット出土遺物(図版6、7 第13図)

ピットから出土した遺物の多くは細片である。1～11は須恵器、12～16は土師器である。1の蓋はP74出土である。口縁部細片で復元口径13.0cm。体部の約1/2にヘラケズリを施す。2はP140出土で、蓋の口縁部を約1/6残存する。復元口径15.0cm。3はP93出土で、蓋の口縁部細片である。焼成不良のため淡黄～灰色を呈する。天井部外面の約2/3にヘラケズリを施す。4～7は高台付碗で、4はP217出土で完形である。胎土は1～3mm前後の砂粒を少し含む。体部から口縁にかけて直線的にたちあがる。底部外面に墨書あり。墨書ははっきりと見えないが、「力」か。5はP63出土。口縁部から体部にかけて約1/2程欠損する。体部から口縁部にかけてやや外湾する。底部内面に重焼きの痕跡かと思われる粘土の痕跡がある。6はP270出土。底部を約1/5残存する。復元高台径9.4cm。7はP239出土。底部を約1/4残存する。復元高台径10.4cm。底部外面の調整は回転ヘラ切り後ナデ調整である。8はP246から出土した杯蓋の口縁部細片である。口縁部内面にかえりが付くが欠損している。9はP51から出土した高杯の口縁部細片。口縁部は体部からほぼ直線的に立ち上がる。10はP214から出土した小壺で、口縁部を欠損する。胴部下半から上半中ほどまで回転ヘラケズリ後ヨコナデを施している。外面は全体的に灰釉がかかる。底径5.3cm、胴部最大径7.9cmである。11は長頸壺でP34出土。口縁部と底部を欠損する。胎土は1mm以下の砂粒を少し含む。頸部に沈線がみられる。



第13図 ビット出土須恵器、土師器（1/3）

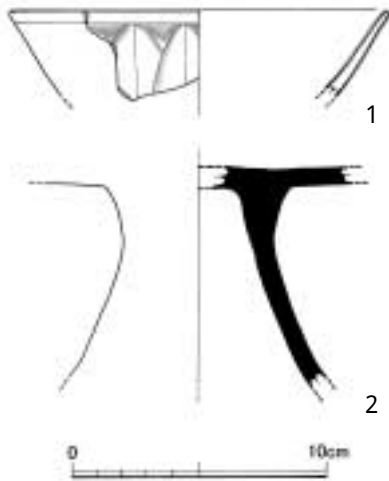
胴部最大径18.7cm。12はP168出土の内黒の黒色土器で、高台付きの椀である。底部のみ残存する。底部内面の調整はミガキ、外面はヨコナデである。13はP35出土の杯で、底部を約1/4と口縁部から体部にかけて約1/8程残存する。底部外面はヘラ切り、体部の下半約1/4はヘラケズリ、体部から口縁部にかけてはヨコナデを施している。14はP277出土で、皿の口縁部細片である。復元口径14.4cm、復元底径10.0cm、器高2.2cmを計る。色調は外面が灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色である。底部は糸切り底である。15、16は甑の把手で、15はP42出土である。胎土は3mm未満の石英、長石、雲母を含む。黒斑あり。淡黄色を呈する。16はP33出土で、胎土は1mm以下の石英、長石を含み、橙色を呈する。

#### 1号溝出土須恵器（第12図）

高台付椀の細片である。砂粒をほとんど含まない。

#### その他の遺物（図版7 第14、15図）

第14図の遺物は遺構検出時に出土した。1は龍泉窯系青磁の椀で口縁部細片である。内面は無文で、外面に鎬連弁文あり。椀Ⅸ類。2は須恵器の高杯で、脚部上半を約1/3残存する。第15図の遺物は土器以外の遺物で、1～3は石器、4は鉄滓である。1は黒曜石の細石刃核で、3号土壌から出土であるが、流れ込みによるものと思われる。細石刃剥取面が2本みられ、反対側に稜線がある。2は黒曜石の石核でP192からの出土で自然面を残す。1の側縁は背稜方向から、2の側面は下方から調整を施す。3は剥片で、石材は堆積岩で風化している。4の鉄滓はP24から出土した。表裏とも多孔質



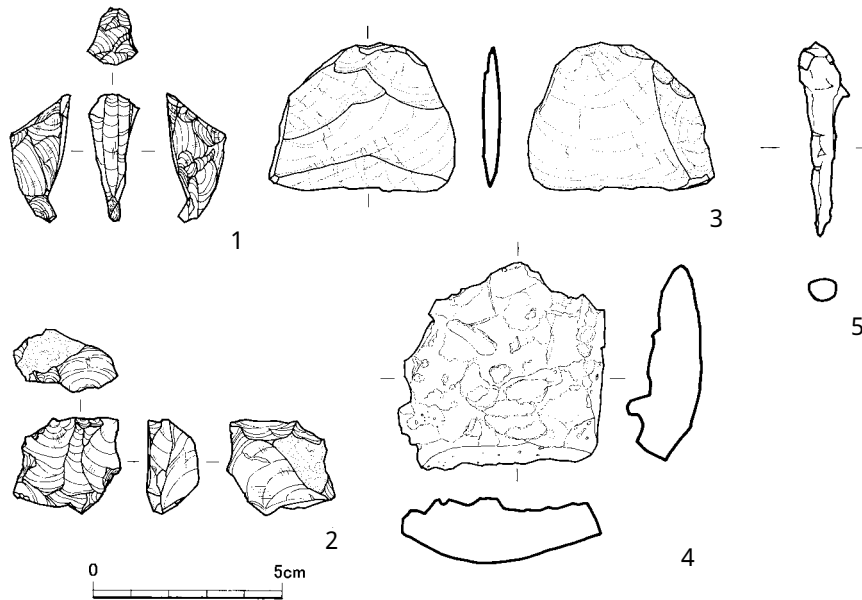
第14図 遺構検出時出土陶磁器、須恵器（1/3）

である。断面が弧状を呈する形状から椀形滓のようであるが、側面は一部方形を呈する。図化していないが、P113から鉄滓が463g出土している。滓の表面は錆がみられ赤褐色である。破面は黒褐色で金属光沢があり多孔質である。磁石に反応する。出土土器は豆粒ほどの細片1点のみで、時期はわからない。

### 3 風倒木痕

調査区において風倒木痕を8ヶ所検出した。風倒木痕は遺構検出面の地山と土色、土質が異なる。平面形はほぼ楕円形で、かつ平面プランの半円から縁部が黒色、円の中心は地山と同じ土色である。

そして、その土層断面は平面でみられた縁部の黒色土が痕跡の底部まで入り込む。このような堆積状況から強風等で倒れた樹木の根が土を持ち上げ、根が持ち上がって地面がくぼんだ部分に腐植土等が自然堆積した痕跡と考えられ、風倒木痕といわれる。人為的な遺構ではないことから、この痕跡を発掘しないことが多い。春日市内でも、



第15図 3号土壇、ピット出土石器、鉄滓、1号井戸出土鉄釘（1/2）

主に市内北部で確認されることがある。

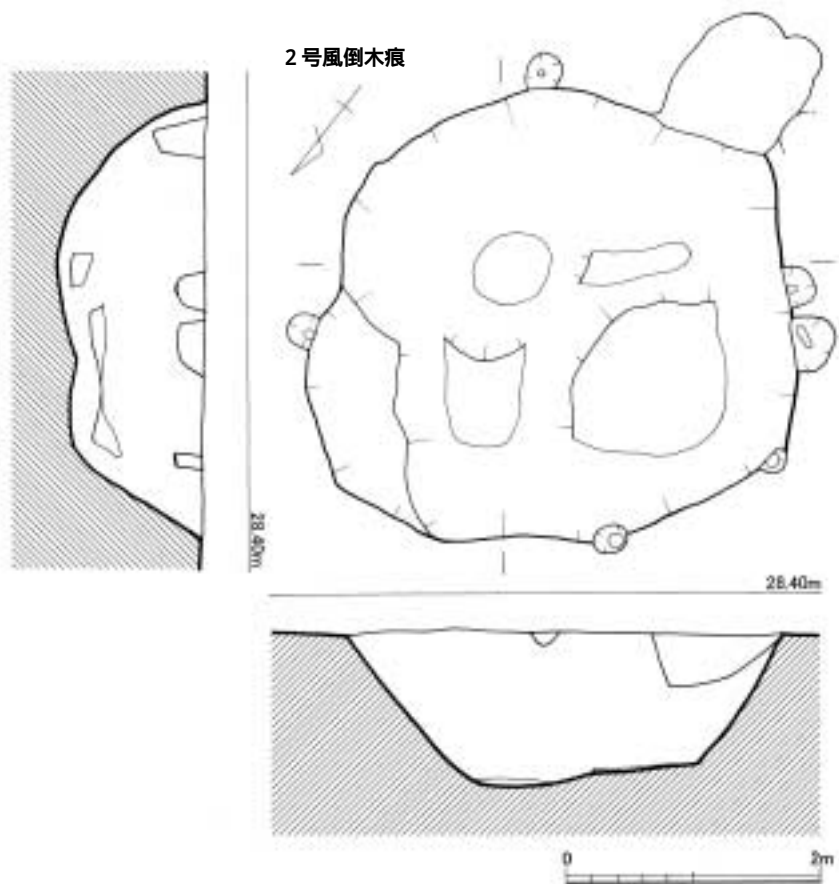
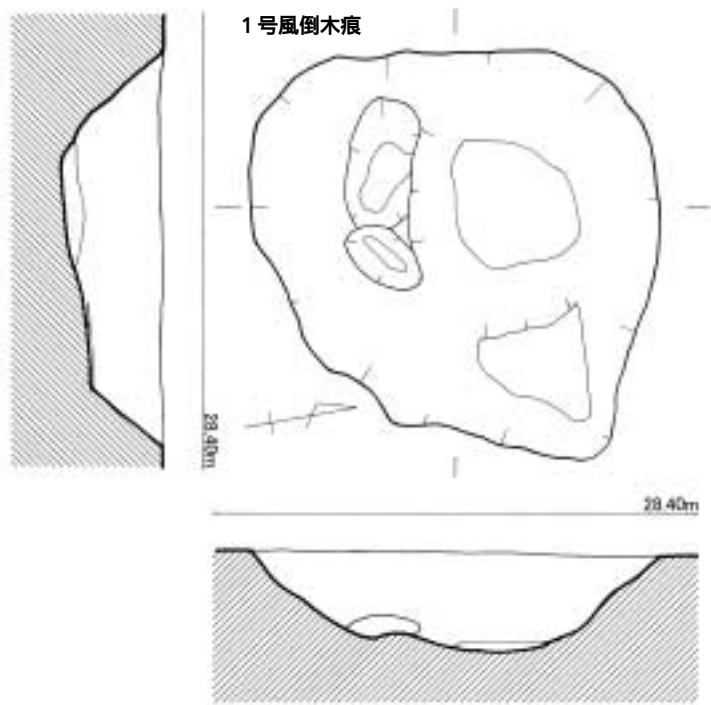
今回の調査ではピットなど的人為的な遺構を検出し、記録を取り終えた後に掘削した。出土遺物はいずれも弥生土器や土師器、須恵器の細片が1～2点程で、遺構の切り合いによる混入と思われる。

#### 1号風倒木痕（図版4-1、5-3 第16図）

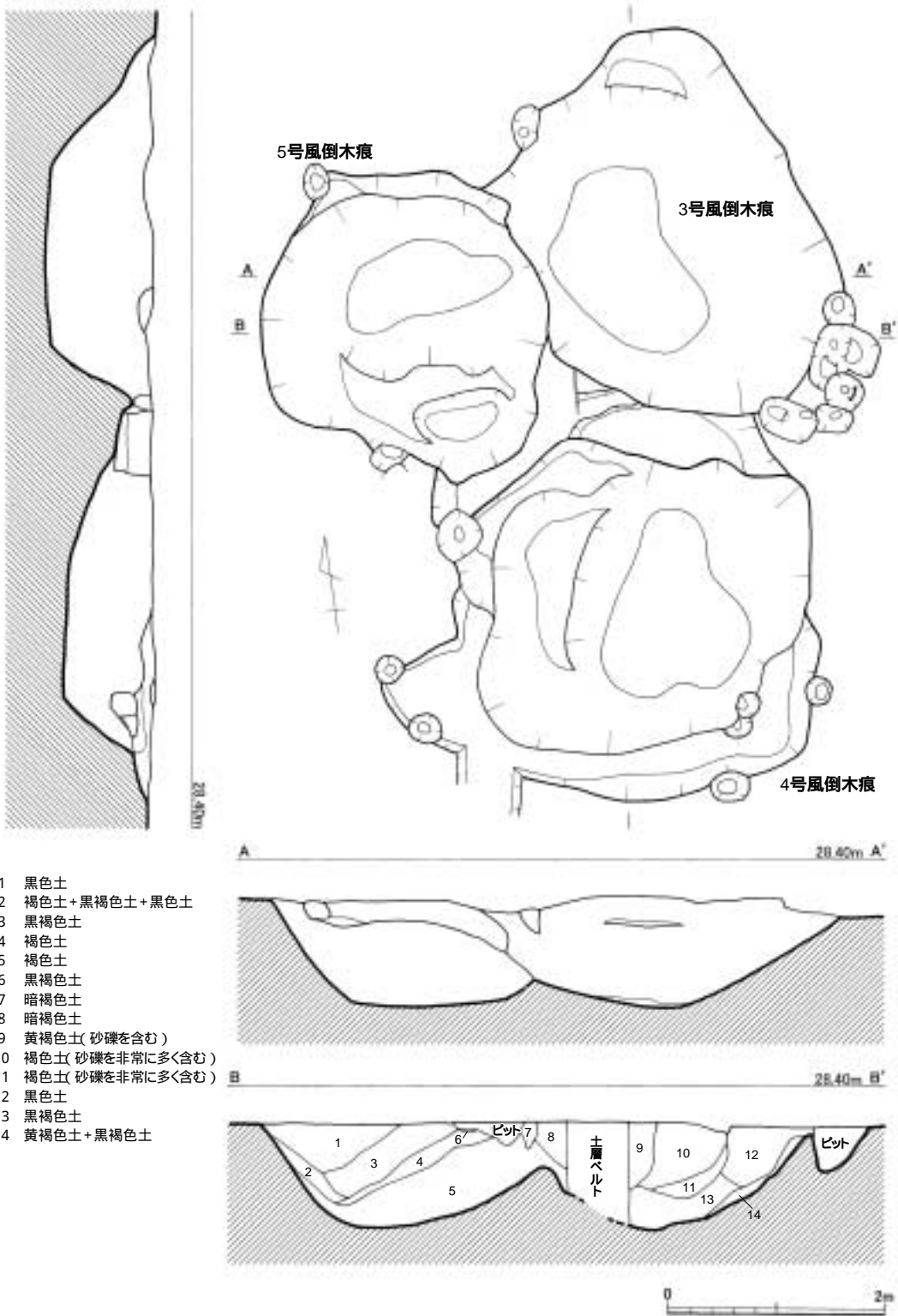
1号風倒木痕は調査区の東部で、平面は不定形を呈し、東西方向約3.2m、南北方向2.95m、深さ約80cmを測る。

#### 2号風倒木痕（図版4-4、5-4 第16図）

2号風倒木痕は調査区の中央部で、平面は不定形を呈し、東西方向約3.5m、南北方向約3.5m、深さ約1.2mを測る。遺構の底部は段状になっているが、段差が10cm前後と浅い。切り合い関係は3号

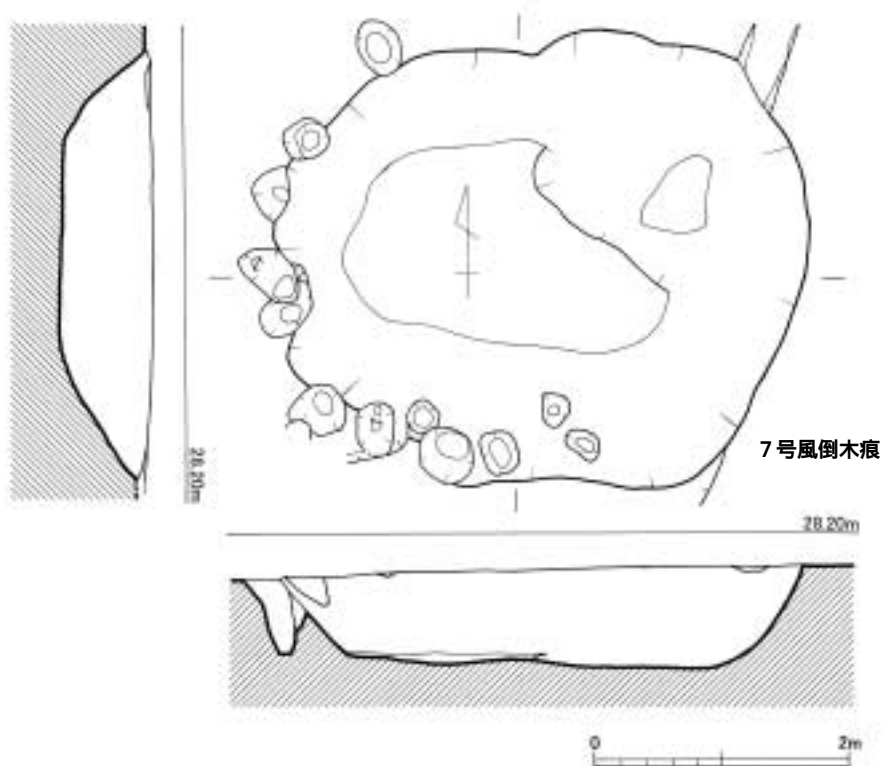
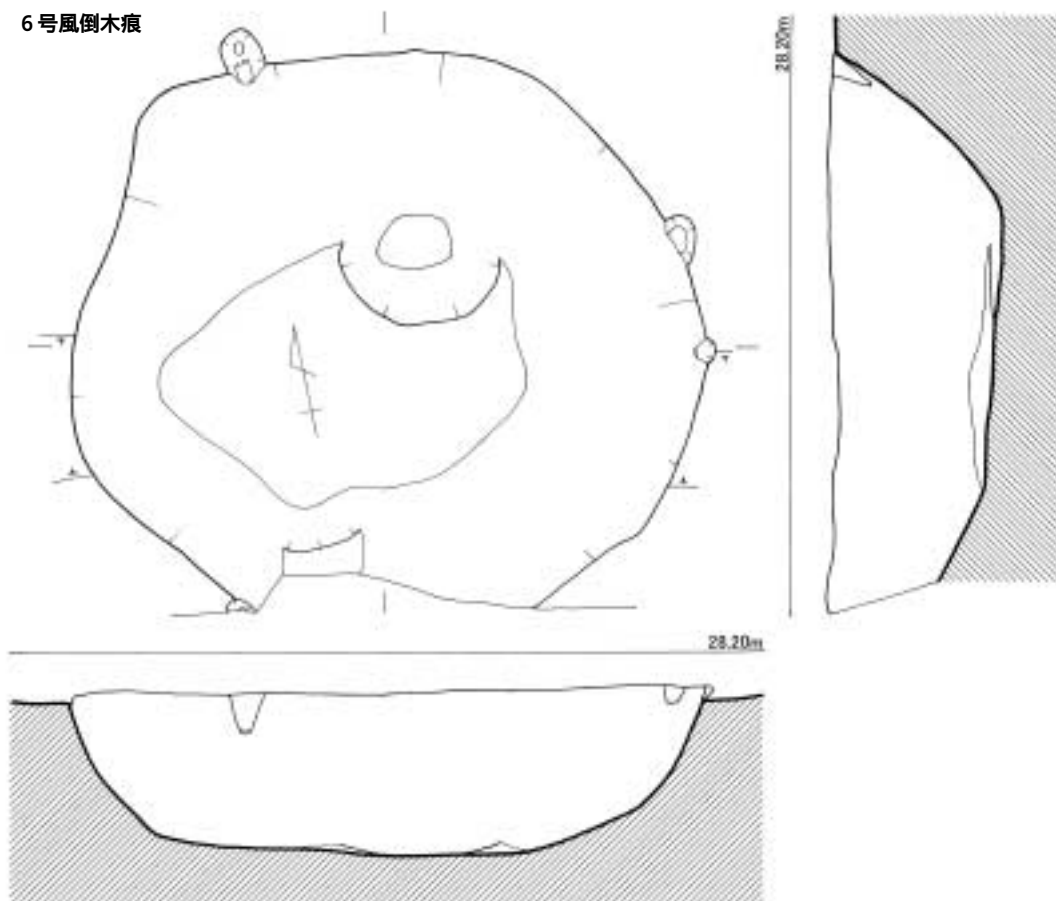


第16図 1・2号風倒木痕 (1/60)

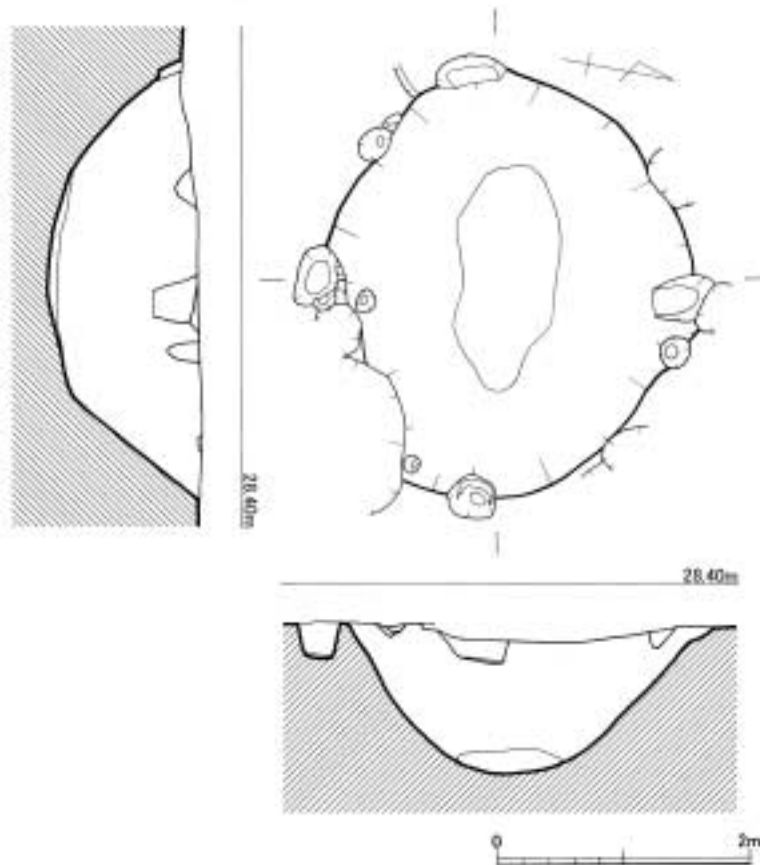


第17図 3・4・5号風倒木痕(1/60)

6号風倒木痕



第18图 6・7号風倒木痕 (1/60)



第19図 8号風倒木痕(1/60)

土壌、切り合うすべてのピットに切られる。

**3～5号風倒木痕**(図版4-5～7 第17図)

3、4、5号風倒木痕は調査区の中央部で検出した。平面はいずれも不定形を呈し、3号風倒木痕は長軸約3.4m、短軸2.7m、深さ約97cm、4号風倒木痕は南北方向約3.65m、東西方向約3.2m、深さ約75cm、5号風倒木痕は南北方向約2.5m、東西方向約2.6m、深さ約95cmを測る。切り合い関係は風倒木痕と切り合うすべての溝、ピットに切られる。風倒木痕間では3号風倒木痕は5号風倒木痕に切られ、4号風倒木痕は3号風倒木痕に切られる。

**6号風倒木痕**(図版4-8、5-5 第18図)

6号風倒木痕は調査区の南部で、痕跡の一部が調査対象地外にかかっている。平面はほぼ円形に近い楕円形を呈し、東西方向約5m、深さ1.35mを測る。底部は段があるが、段差が約10cmである。

**7号風倒木痕**(図版5-1、6 第18図)

7号風倒木痕は調査区の南西部で、不定形を呈し、東西方向約4m、南北方向約3.3m、深さ約80cmを測る。切り合い関係は切り合うすべてのピットに切られる。

**8号風倒木痕**(図版5-2、7 第19図)

8号風倒木痕は調査区の北西部で、楕円形を呈する。長軸約3.5m、短軸約2.9m、深さ1.15mを測る。切り合い関係は切り合うすべてのピット、土壌に切られる。



## IV ま と め

門田遺跡5次調査では旧石器時代、弥生時代、奈良時代、鎌倉時代の遺構、遺物を検出した。県教委調査の門田遺跡や隣接する遺跡を含めて概観すると、時代を通してとぎれることなく形成された複合遺跡であるといえる。

弥生時代の遺構として確実なものは土壌2基である。隣接する遺跡も含めると弥生時代の遺構は、門田遺跡辻田地区の貯蔵穴群や住居跡、門田地区甕棺墓や原遺跡の甕棺墓、天神ノ木遺跡の住居跡など、中位段丘の西端に多くみられる。門田遺跡5次調査地点は対象地北東部の遺構密度は低く、集落の中心は門田遺跡辻田地区や天神ノ木遺跡にあると思われる。

歴史時代以降の遺構は、ピットが多数検出され遺構の密度は高いが出土遺物が少ないため断定はできないが、掘立柱建物跡があると思われた。しかし、調査中にピットの配置から掘立柱建物跡を認識することができなかった。

平成6年度以降に行った春日市教育委員会による門田遺跡の調査では、8世紀以降の遺構が主体をなしているようである。5次調査の北に隣接する2次調査において8～12世紀の遺構が検出された遺構面(上層)では、掘立柱建物跡が調査区の南部にあり、北部に井戸が密集している(註1)。門田遺跡4次調査では井戸1基と土壌5基が検出されているが、遺構の密度は2次調査の調査区北部と同様である(註2)。5次調査では掘立柱建物跡を認識できなかったが、遺構の密度からみると、奈良時代以降の集落の中心である可能性が高く、調査区北側隣地の2、4次調査地点はその北辺にあたりと考えられる。かつ、5次調査地点の東部は遺構の密度が低いことから、集落の中心は福岡県教育委員会の調査による門田遺跡門田地区へとつながるといえる。

時期がわかる遺構としては1号井戸があり、井戸が使用されなくなった時期は出土した土師器や陶磁器から14世紀初頭頃と考えられる(註3)。また、1号井戸からは鉄釘も出土している。鉄釘については、9世紀から14世紀の太宰府周辺・博多遺跡群周辺の木棺墓出土釘の考察があるので参照した(註4)。この考察では時代とともに釘の長さが短くなることを指摘している。5次調査で井戸から出土した鉄釘は1本のみであるが、上記考察による当該時期の釘の長さの平均値が5.12cmであり、1号井戸出土鉄釘がこの数値に近い長さであることから、上記考察においても矛盾しない。

この他、出土遺物については、鉄滓がP24とP113の2ヶ所から出土している。いずれも時期は不明である。周囲における製鉄関連遺構は福岡県教育委員会によって発掘調査された門田遺跡辻田地区があり、製鉄炉跡に関連した鉄滓、木炭、砂鉄、炉壁跡が検出されている。門田地区においても鉄滓、鞆羽口が出土しており、成分分析の結果、製錬滓と鍛冶滓の両タイプが出土しているとある。また、これらの時期については7世紀後半の須恵器を伴う住居跡と、10世紀後半に相当する木棺の床面とから鉄滓が出土していることから、これらの遺構の時期に相当するのではないかとしている。(註5)。この他、門田遺跡から南に約2.5kmに位置する平蔵遺跡では15世紀代の製鉄関係遺構が検出され、大鍛冶から小鍛冶にいたるまでの作業がなされていたと想定されている(註6)。当遺跡は県教委調査の

門田遺跡門田地区と同様に焼土塊や炉壁片は検出されておらず、鉄滓の量も少量である。時期も断定できないため、鉄滓の位置付けが困難である。門田遺跡と周辺の遺跡を含めて「村の鍛冶や」のような小規模な小鍛冶が普遍的に存在したのではないかと推測し、今後、近隣における調査にのぞみたい。

風倒木痕については人為的な遺構とは考えていないので、発掘調査において毎回調査はしていない。今回の調査で掘削した風倒木痕は遺構検出面から黒色土が入り込んでいる深さが約1m前後と深い。経験的に台風などの強風によって根を持ち上げて倒れる樹木は根が地中に浅く張る種類の樹木であることが多く、根が地中深くに張る樹木は枝や幹が折れると考えられる。門田遺跡5次調査地点は地形の傾斜はほとんどなく平坦面にあることから、地中に深さ1m前後に根が張る樹木が根ごとたおれるか疑問である。

(註1) 春日市教育委員会編「3. 門田遺跡」『春日市埋蔵文化財年報3』(1995)

(註2) 春日市教育委員会編「3. 門田遺跡(2次調査)」『春日市埋蔵文化財年報4』(1996)

(註3) 出土遺物については、以下の報告書によった。

山本信夫「土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第7集(1983)太宰府市教育委員会

宮崎亮一編『大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』太宰府の文化財第49集(2000)太宰府市教育委員会

中島恒次郎「1. 食器様相と実年代」『大宰府条坊跡XVI 分析編』太宰府市の文化財第52集(2002)太宰府市教育委員会

(註4) 山村信榮編『大宰府佐野地区遺跡群Ⅶ』太宰府市の文化財第39集(1998)太宰府市教育委員会

(註5) 井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第3集(1977)福岡県教育委員会

(註6) 佐藤昭則、茂和敏編『平蔵遺跡』那珂川町文化財調査報告書第22集(1990)那珂川町教育委員会

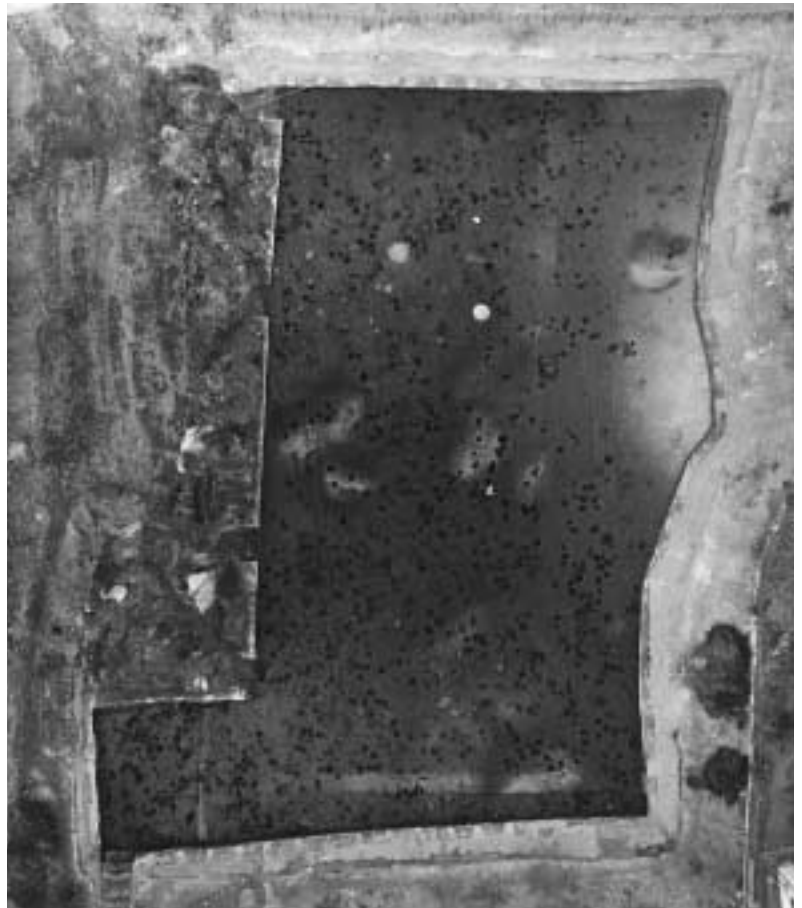
圖 版



1 調査区全景（南から）



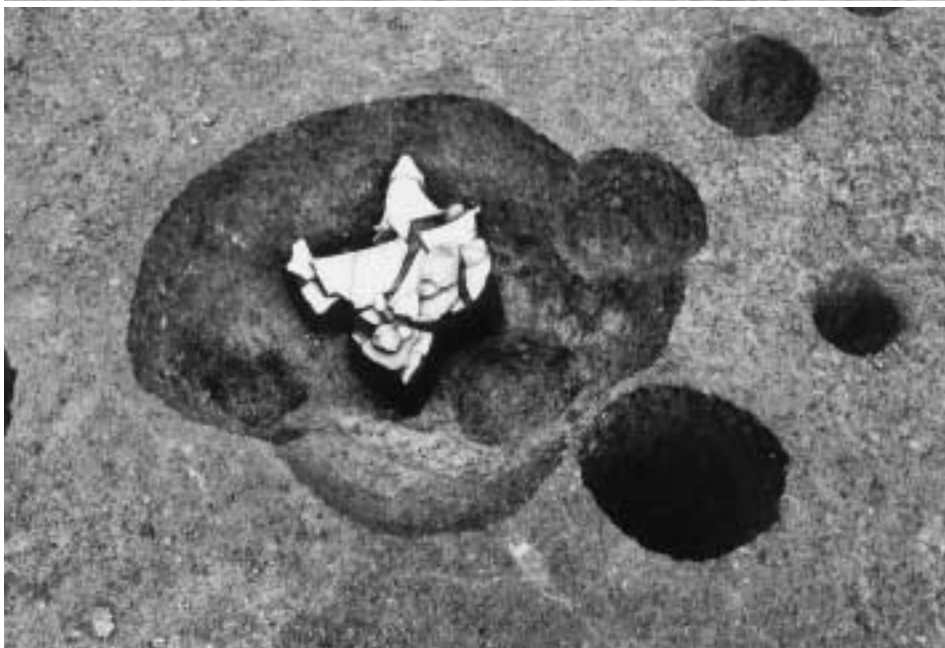
2 調査区西側全景



3 調査区東側全景



1 2号土壇土器出土状況  
(東から)

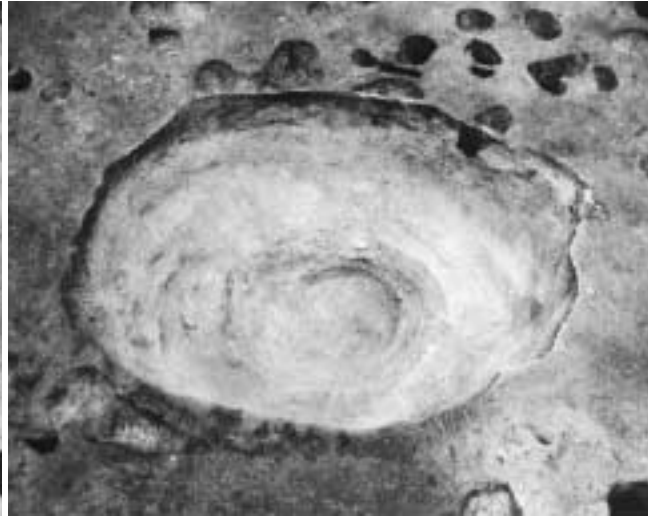
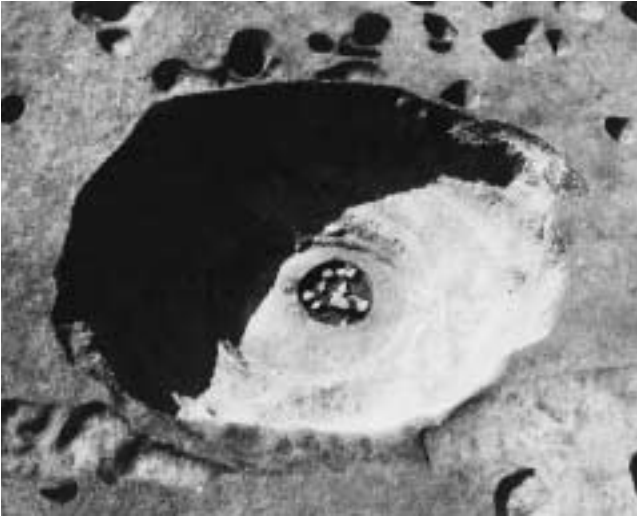
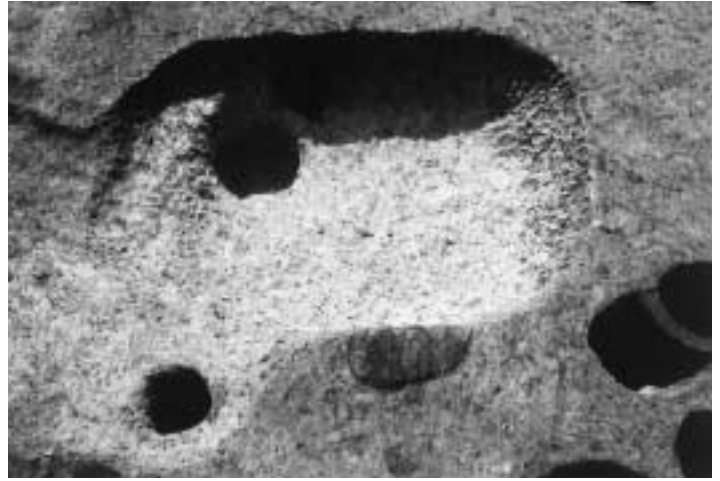


2 3号土壇土器出土状況  
(北西から)



3 4号土壇(東から)

- (右) 1 5号土壌(南から)
- (左下) 2 1号井戸土器出土状況(東から)
- (右下) 3 1号井戸完掘状況(東から)

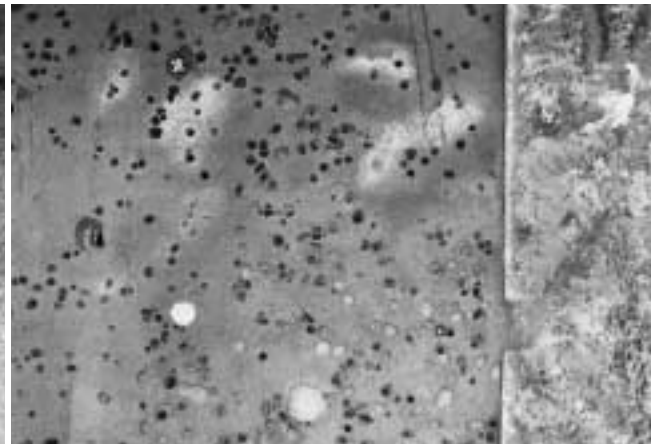


4 1号井戸土層断面(東から)





1 1号風倒木痕掘削前(東から)



2 調査区北西部風倒木痕掘削前



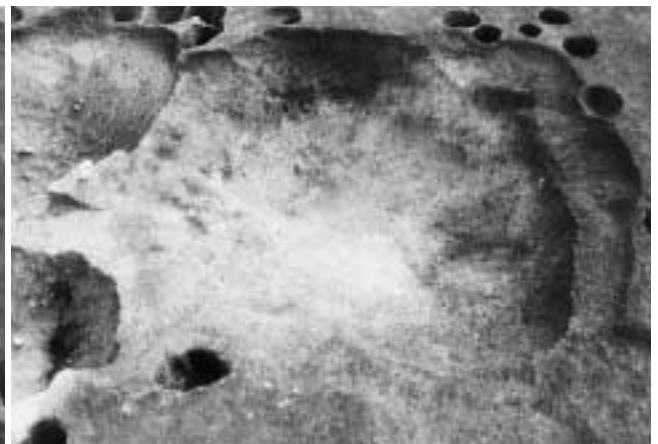
3 1号風倒木痕完掘状況(東から)



4 2号風倒木痕完掘状況(南から)



5 3号風倒木痕完掘状況(北東から)



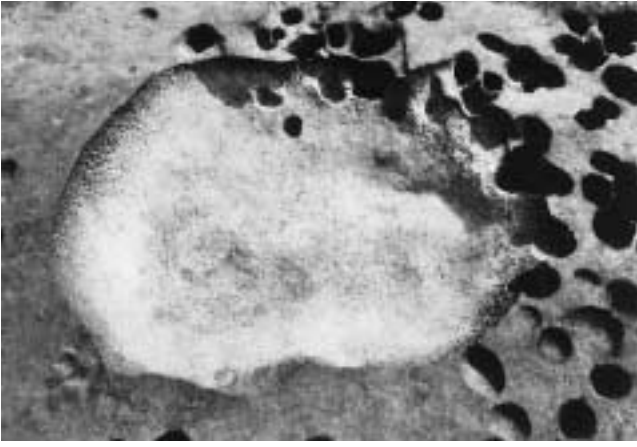
6 4号風倒木痕完掘状況(西から)



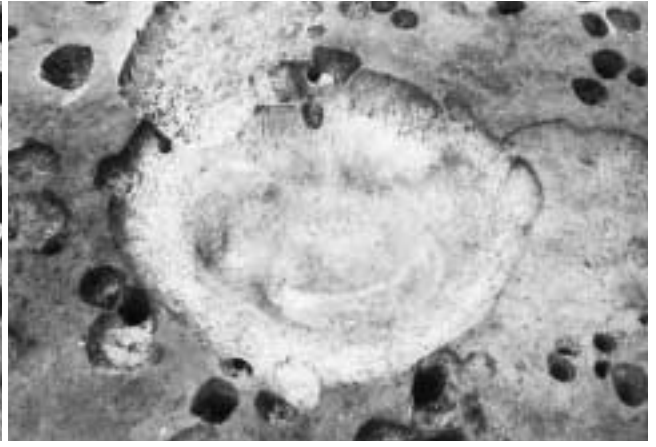
7 5号風倒木痕完掘状況(南から)



8 6号風倒木痕完掘状況(北から)



1 7号風倒木痕完掘状況(北から)



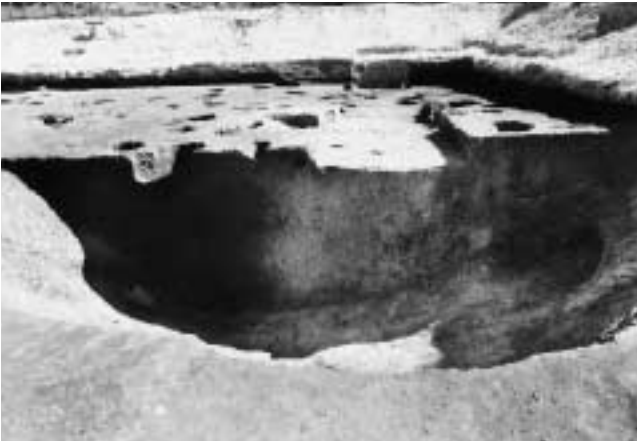
2 8号風倒木痕完掘状況(北から)



3 1号風倒木痕土層断面(西から)



4 2号風倒木痕土層断面(西から)



5 6号風倒木痕土層断面(西から)



6 7号風倒木痕土層断面(西から)



7 8号風倒木痕土層断面(西から)





图6 2



图6 4

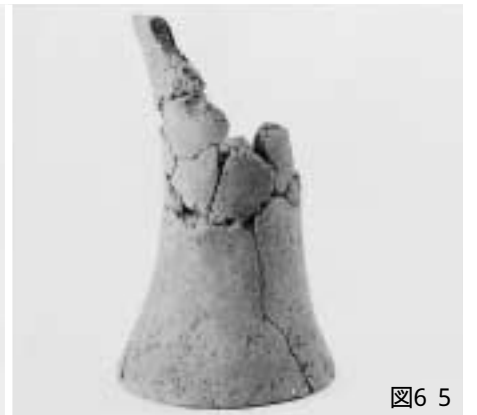


图6 5



图6 7



图11 1



图11 2



图11 9



图11 10



图13 4

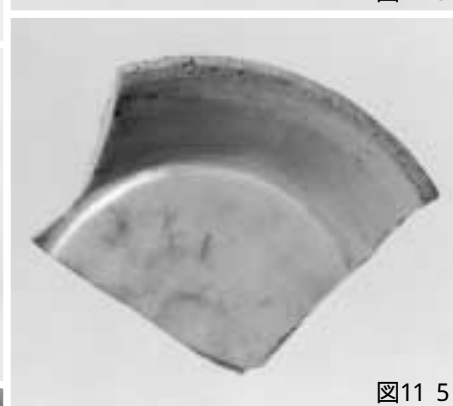


图11 5

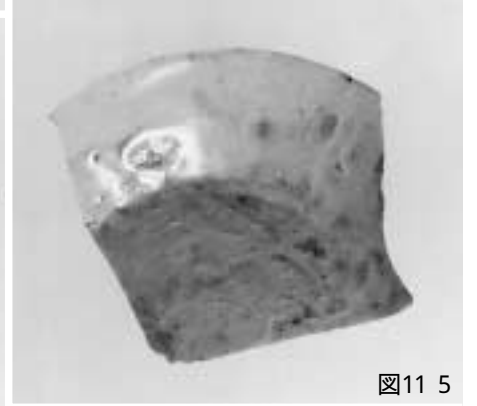


图11 5



图13 4



图13 11



图13 10



図13 5



図13 15



図14 1



図13 13



図13 16



図15 3

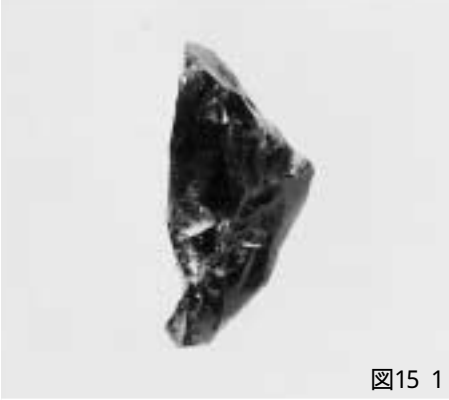


図15 1



図15 2



図15 5



P113出土鉄滓



図15 4

土壌、ピット出土土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄滓、井戸出土鉄釘

## 報告書抄録

ふりがな	もんでんいせき							
書名	門田遺跡							
副書名	福岡県春日市上白水所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	春日市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第57集							
編著者名	森井千賀子							
編集機関	春日市教育委員会							
所在地	〒816 0804 福岡県春日市原町3丁目1番地5 TEL 092 584 1111							
発行年月日	2010年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。	東経 。	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
門田遺跡 (5次調査)	ふくおかけんかすがし 福岡県春日市 かみしろうず ちよめ 上白水7丁目 ばんち 157番地			33° 31' 07"	130° 26' 19"	1997.1.17 、 1997.3.12	969m <sup>2</sup>	開発に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
門田遺跡 (5次調査)	集落	弥生～ 鎌倉	土壌、井戸	弥生土器、土師器、 須恵器、石器				
要約	<p>当遺跡は那珂川の支流である梶原川の右岸で河岸段丘上に位置し、標高28m前後を測る。昭和47年以降、福岡県教育委員会によって調査が行われた門田遺跡(門田地区)の東側にあたる。県教委によって調査された門田遺跡では弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構と遺物が出土している。</p> <p>当遺跡においても、県教委によって調査された門田遺跡と同様に弥生時代から鎌倉時代の遺構と遺物が検出された。弥生時代の遺構はあるが、集落の中心は西側の門田遺跡北台地(辻田地区)及び南側の天神ノ木遺跡にあると思われる。奈良時代以降の集落の一部考えられるが、周辺における発掘調査の状況や、今回の調査地点で東部の遺構密度が低いことから、集落は東側には広がらず、県教委調査の門田遺跡北台地へとつながっていくものと想定される。</p>							

# 門 田 遺 跡

春日市文化財調査報告書  
第57集

平成22年 3 月31日

発 行 春日市教育委員会  
福岡県春日市原町 3 丁目 1 番地 5

印 刷 株式会社 昭和堂 九州支店  
福岡県福岡市博多区東比恵 4 2 10